

ご挨拶

このたび、駐バチカン日本国大使の職を拝命し、当地に着任いたしました中村芳夫です。5月9日に、フランシスコ教皇に信任状を捧呈しました。

「バチカン市国」は、世界で最も小さな国です。面積は0.44平方km、人口は800人あまり。

国の大きさは、国土の広さや国民の数では測れない。これほど如実に示す例はありません。国家元首は、ローマ教皇です。ローマ教皇は、悠久の時の流れの中、変わることなくカトリック教徒を支え、導く至高の存在とされています。

2012年に第266代教皇に選出されたフランシスコ教皇は、バチカンの歴史上初めて南米アルゼンチンの出身であり、かつ初めてイエズス会の出身です。教皇は、就任の翌日から改革的な活動に取り組み、12億人と言われるカトリック教徒にとどまらず全世界の人々に奉仕しておられます。平和の達成、貧困の撲滅、核の廃絶、人権の尊重、環境の保全などの課題を重視し、清貧を旨として、労苦を厭わず各地・各所に足を運び、良心の声を届け続けております。その姿に触れ、共感と尊敬の念を抱く人々の輪は、宗教、宗派を問わず広がっています。

現在、世界各地で争いや諍い、反目が後を絶たず、その犠牲者が増え続けています。問題は、その源が人の心にあるということです。根は深く、一掃するのは極めて難しい状況です。しかし、人の心に訴え、動かすことができるのも人の心だけです。人の心に訴えるには何よりもまず、相手の言うことをよく聞き、理解しようとする一方で、自分の気持ち、考えを相手に真正面から何度でも根気強く正直に伝える努力が不可欠です。

バチカンは今、宗教、宗派の垣根を超えて、対話を通じた交流強化を積極的に進め、教皇自らが世界平和の実現に向けた力強いメッセージの発信を続けています。教皇は、2015年9月のキューバ訪問に際し、東西冷戦時代から対立を続けていた米国とキューバが同年7月に国交を回復したことを事例として挙げ、対話や協調による世界平和を呼びかけました。2016年2月のフランシスコ教皇

と正教会のキリル総主教との会談は、1000年近く続いた両教会の歴史的和解と大きく報じられました。

東日本大震災の惨事の中、多くの日本人が他人を思いやり、わが身を省みず勇気ある行動をとり、世界の賞賛を浴びました。私自身そうした行為を目の当たりにし、わが国の最大の財産は、先祖代々脈絡と受け継がれてきた伝統、社会によって育まれた「人」である、と再認識しました。それはなにも日本人に限ったことではありません。あの時、バチカンをはじめ世界中の人々の善意が、未曾有の国難に打ちひしがれた日本に寄せられました。その好意は圧倒されるほど暖かく、優しく、力強いものでした。人がこの世にある限り、日常のどこにでもあるありふれたもの。されど途方もなく尊いもの。それが目に見える形となって、あの時わが国に届けられました。教皇が語る言葉の数々は、こうした大切なことを語りかけています。

今回大役を仰せつかるまで私は、経団連の副会長・事務総長、内閣官房参与として、内外の政治、経済、労働、農業、報道、学術、宗教など多様な分野の方々から学生や主婦の方々に至るまで、実にさまざまな人たちと交流し、数限りない対話・話し合いを経験してまいりました。そこから身をもって学んだことは、一対一で会い、一人の人間として腹蔵なく語り、また相手の話に真摯に耳を傾ければ、必ず理解は深まるということです。

私の使命は、日本とバチカンの双方に、相手国の実情、なかんずく人の思いや考えを正確に伝えることです。あるがままの日本、日本の文化や風習、伝統を紹介していきたいと考えております。日本とバチカンがさらに理解を深め合い、世界に向け重要なメッセージを発していくことが待たれています。当館一丸となって、全力で職務を全うしてまいります。

以 上